

やれば出来る!

出来ないのはやらないからだ

中野 富雄

楽しい農業——自然の恩恵を満喫しながら、農業を楽しみたいとは、誰れしも願うところですが、しかし、事実はどうでしょうか？ 重なる障壁、重い労働、そして絶えず不満の声が聞こえます。三、五〇〇万の農村人口をかかえている日本では、膨大な予算のもとに農業推進の政策が実施され、数多くの農業改善の指導者の声が聞こえて来ますが、それでも、いつも曲り角に立っているような気持ちがいちたします。しかし、そんな中であって、堂々と立派に農業を楽しんでいる人もたくさんあるのです。種々な外部の情勢の目まぐるしい変化の中にあつて、こうして立派な経営を続けていく人々は、運が良かったのでしょうか？

そこには、絶えざる努力と工夫と前進しようとする意欲があつたのにはかなりません。楽しい農業が出来ないのは、出来ないのではありません。やらなかったのだといつても過言ではありません。何事もそうですが、やれば出来ることが多いのです。宇宙にまで飛んでゆける今日、勿論たった一人の力では、どうすることも出来ないようなことでもあります。やる気があり、それ

に伴う努力と工夫があれば、大抵のことはなしとげられるのだということを確認したいと思ひます。

ここに御紹介するのは、北海道の北の涯、遠軽町に住んでいる東海林実さんの工夫と努力が、そこでは不可能と思われた楽しい農業の基盤を造りあげたお話しです。



東海林さんは、北海道も北の涯に近い天北地方の遠軽に生まれました。この遠軽地方は寒冷で、酸度の高い重粘土地帯であつて、雑穀、馬鈴薯、薄荷などの農産物がありますが、その気候及び土壌の不良条件を克服するために、当然畜産が農業の主体となつて発展して来た地帯です。東海林さんは中学を卒業すると、両親からこの不良条件下の農業には苦勞のみがつきまとうから、サラリーマンになるか、商売でも始めたらとすすめられたそうですが、広々と連なる耕地と自然の恩恵を一杯にうけて楽しんでいられるような酪農の姿が心の奥深く刻みこまれていたため、周囲の反対を押し切つて、開拓への途に飛びこんだそうです。

昭和三十一年、三十一万円の資本を手にし

て、表土も五〜六センチかない重粘地に畝一本での開拓への闘いが始まりました。手に入れた農地は、酸度PH3.0〜3.5の原野ともいうべきところ、先に入った人々も二〜三年ともちこたえることが出来ないような土地でしたが、将来を夢見る東海林さんは敢然としてこの土地にいどんだわけでした。

三十一年の七月、早速工事にとりかかり、四〇坪の牛舎、堆肥場、尿溜が完成しましたが、折悪しくこの年は冷害凶作の年となり、自分の住宅を建てることが出来ず、牛舎内の一部を仕切つて住宅に当て、正に牛と共に生活することになりました。耕地面積は一一町五反、それも荒れはてた土地であつたのです。

農業は一年きりの事業ではありません。

東海林さんは五カ年のプランを樹て、基本方針として、次のことを逐次完成しようと考えました。

- 1 地力の培養
- 2 生産基盤の拡張
- 3 乳牛の改良

いずれも、これから長く農業を営み、畜産主体の経営に入るためには必要なことです。

三十一年に成牛二頭を導入、それも思い切つて高等登録をもつた良い牛を買ひ入れました。三十四年には四町歩の山林を子供達の将来のために購

入、更に三十五年には、原野を含み耕地四町五反を増加し、逐年その実績を挙げて行つたのです。

東海林さんが、この開拓酪農に踏み切つた決心の基盤になつたのは、このような不良土壌、気候の地帯でも、牧草の生活は出来るし、それが地力の培養になり、且労力の節約になることを知っていたからです。

少ない家族労働力、夫婦二人の僅かな力で、一年一年と牧草地がふえてゆきました。家畜も現在は成牛五頭、育成牛二頭に増加し、六年間の労苦の結晶である緑の草地からは、これ等の乳牛達が悠々と健康を保ち、生産をあげるに十分な牧草が生産されるに到つたのです。昭和三十三年に四一石の間牛乳生産量であつたが、現在では一〇六石の生産と倍以上の増加となり、年間粗収入も三十二年は三〇万円をそこそこあつたのが、乳代、個体販売その他を含めて、一四五万円と飛躍的な増加を見、しかも今後の五カ年間は、牛乳生産二四〇石、

牧草と園芸 七月号 目次

◇表紙写真 ぼくらの仕事 (酪農協会提供)	中野 富雄	三
◇やれば出来る	小林 作衛	六
◇これから播種できる夏作飼料作物	小野 利郎	九
◇座談会・飼料作り北海道一を訪ねて(2)	小野 利郎	三
◇家畜ビートの品種比較	小野 利郎	三
◇秋まき蔬菜で注意してほしいこと	小野 利郎	三
◇会社だより 上野幌畜種場・藤の沢農場より	小野 利郎	三
◇雪印のたね特価表	小野 利郎	三
◇読者のページ	小野 利郎	三

昭和 32、36 年度における作付けの推移

作物名	32 年		36 年	
	面積	備考	面積	備考
1代雑種	0.5	5号	0.7	5~8号使用
秋播小麦	0.2	亜麻前作(クローバー混)	0.4	
エムバ	0.3	ビクトリー1号	0.25	クローバー混
馬鈴薯	0.1	農林1号	—	
野田	0.1	自家用	0.1	自家用
水田	1.5		1.5	
刈えんばく草	—		0.025	クローバー類混
計	3.7	アルサイククローバー、チモシー	3.4	下表の通り
			6.7	

昭和 36 年における牧草作付け内訳

区分	面積	牧草名	播種量	生草収量	施肥量	備考
青刈り用	0.6	赤クローバー	1.0	10%当り	肥料(4月28日) 硫酸安 8kg 溶過燐 30kg 塩加 8kg 牛尿(5月3日, 6月24日)2石	
		アルサイククローバー	0.5	2回刈り		
		ラデノクローバー	0.3	7,000kg		
		チモシー	0.5	3回以降		
		オーチャード	1.0	放牧		
		ベレニアルライ	1.0			
乾草用	2.0	赤クローバー	1.0	2回刈り	追肥(5月10日) 溶過燐 30kg	アルサイククローバーが多いため、昭和37年にオーチャード播種予定
		アルサイククローバー	1.0	4,800kg		
		チモシー	1.0			
		オーチャード	1.0			
放牧地	0.8	(草地改良用種子)			共進会に出陳	

年間総収入一八〇万円を夢見ることが出来るまでの余裕が出て来ています。これといふのも、恐らく牧草の栽培と利用が合理的であり、これが乳牛の最高能力を發揮させ、しかも地力を高めて総体の収入をあげ得たものと考えられます。

果たせるかな、昭和三十六年夏、北海道庁と北海道草地協会主催の北海道における集約牧野造成改良事業共進会に東海林さん苦心の牧草地が出陳され、見事最優秀賞を受け、農林大臣、北海道知事始め各般から

の表彰をうけました。東海林さんが出陳した牧草地は、昭和十四年七月、国の補助をうけ、集約牧野として造成にかりました。笹始め雑草の生い繁げる灌木林は伐開され、レーキドーザーで抜根が処理されました。新しく陽の目を見た新土は重粘土質、ゴロゴロしている土塊はデスクハローを縦横に四回もかけて奇麗に整地、砕土が行なわれました。そして牧草一辺倒を念願する東海林さんはいち、一〇%当り炭酸石灰〇・五ト、熔

成燐肥三〇%、堆肥四、〇〇〇%を投入、働き込んだのでした。整地の終わった九月、そこに秋播小麦を播種、これにも一〇%当り硫酸八%、過燐酸石灰一、二%、溶燐一、二%、塩加四%、を施用して、土地の整備と地力の培養を図りました。翌年、雪どけ早々四月に、萌え出ようとする小麦に硫酸八%を追肥、同時に牧草を播種しました。牧草の生産は量の増産と共に栄養生産が大切だという観点から、次のようなまめ科牧草といね科牧草の混播をいたしました。

赤クローバー
アルサイククローバー
オーチャードグラス
ラデノクローバー
チモシー
ベレニアルライグラス

各々一〇%当り〇・三%宛として混播

すくすく生育した秋播小麦は七月予定通り収穫、あとは一面の緑の牧草地となり、更に増収を期待する東海林さんは、八月十五日硫酸一、二%、過石一、二%、塩加四%、を小麦刈り取り後に追肥しています。北の国の秋は早いのですが、牧草は順調に生育し、九月二十日から十月三日まで、軽い放牧を行なうことが出来ました。

長い冬が終わって、昭和三十六年の春がやって来ました。四月二十八日、重ねて一〇%当り硫酸四%、溶燐三〇%、塩加八%が施肥されました。六月二十日牧草の開花が始まり、一番刈りが行なわれました。牧草類の栄養生産をあげ、再生力を維持するためには、開花始めの刈り取りが大切な

との信念から、その地方では早きにすぎると考えられる六月中旬の刈り取りは成功して、二番、三番刈りも意外な多収をあげることが出来たのです。刈り取り日と反収は次の通りで、あの荒れはた灌木林の跡からこれだけの牧草がとれるとは誰れが予想したでしょうか。

刈り取り日 一〇%当り生草量(キ)

一回 六月二十日 四六〇〇

二 八月二十二日 三、三〇〇

三 九月十七日 一、七九〇

計 九、六九〇

もちろん、刈り取り直後には、直ちに追肥が行なわれ、一番あとは尿素が一〇%当り二〇%、二番刈りあとは牛尿が一〇%当り三石施用されました。

九、六九〇%の適期に刈り取られたいね、まめ科混播牧草の飼料価値を計算してみま



一番刈り、坪刈り跡 (昭 36. 6)



東海林氏

北海道における一般の草地の一〇〇ア当たり生草収量は四、〇〇〇キを下回っていると思われる。また、恐らくこの土地で、良い加減の施肥であれば、四、〇〇〇キを遙かに下回る収量であったらうと想像されます。一〇〇ア当たり施肥金額は、五、〇〇〇円に近く、常識を破るものであった

しよう。混播生牧草一キの中には、〇・一五四飼料単位、一五坪の可消化純蛋白質が含まれているといわれています。従って、九六九〇キの中には、一、四九二飼料単位、一四五・三五キの可消化純蛋白質が含まれていることとなり、乳牛経済検定組合の飼養標準によれば、中型の乳牛で、脂肪率三・五〇程度の牛乳を約二、五〇〇キ(約一四石)搾乳するに足りるだけの飼料価値をもっていると判断され、机の上の計算だけすれば、牛乳代として一〇ア当たり約七万円の粗収入があったことになるわけで、この北辺の地帯では想像も出来なかったことです。おまけに牧草による地方の増進、堆厩肥、牛尿の生産、労力の節約など併わせ考えればどういふことになりましょうか。全く考えさせられることで、これが、過去長く非生産地として眠っていた土地から、僅か二・三年の短期間に完成されたことをよく考えなければならぬと思うのです。確かに造成までの人知れぬ苦労はあったと思いますが、出来上がった成果の大きさに比べれば、その苦労も消し飛んでしま

うでしょう。「やれば出来る」とはこの事実なのです。この増産の成果は、種々な努力の結晶によってもたらされたのですが、中でも思い切った施肥の直接の効果ということが出来るようです。一〇ア当たりの施肥量を整理してみますと次の通りです。(小麦施肥分を含む)

堆厩肥 四ト
炭酸石灰 〇・五ト(平均市販単価キロ三円として 一、五〇〇円)
安 三二キ(平均市販単価キロ一八円五錢として 五九三円)
石 二四キ(平均市販単価キロ一四四〇六錢として 三三七円)
過 磷 七二キ(平均市販単価キロ一五五〇三錢として 一、〇八二円)
熔 九八八九錢として 三二八円)
塩化加里 一六キ(平均市販単価キロ一〇二キとして 八二二円)
尿 素 二〇キ(平均市販単価キロ四〇円六一錢として 八二二円)
牛 尿 三石 四、六四二円

- 目標
- 1 土壤改良——酸土の矯正
 - 2 生産基盤の拡張——土地の購入
 - 3 機械化——ウオターカップ、ミルカーの導入

年次	乳代	牛乳	米代	林入	山出	合計
昭和32年	41石 164,000	—	35俵 140,000	—	—	304,000
36年	106石 530,000	2頭 200,000	100俵 420,000	300,000	—	1,450,000
42年	240石 1,200,000	3頭 400,000	60俵 264,000	—	—	1,864,000

でしようが、一万キに近い優良牧草の生産は、あらゆる点から大きなプラスであったことは、誰れしもうなずけることと思われ

ます。

これが真の牧草づくりと言えましよう。長い酪農の歴史をもっている人でも、自信をもって、ここまでは進み得なかったことです。牧草の生産力をまざまざと見せてくれたといっても過言ではありません。最優秀賞が、東海林さんの頭上に輝いたのも当然といえましよう。

東海林さんは、過去の経験を更に生かして、五年後の目標を今、たてています。それは最初にふれましたが次の通りです。

宇宙船もとぶこの世の中に、東海林さんの地帯には、まだ電燈が入っていません。

① 炭酸石灰の大部分は酸土矯正に利用されたと考える。

② 実際にはこのほかに天然に補給される肥料成分があり、また施用された肥料分の中には流亡、残存した成分もあると考えねばならぬ。

(参考) 施肥成分と生産牧草中の肥料成分の比較

区分	施用量(kg)	Ca(kg)	N(kg)	P(kg)	K(kg)
炭酸石灰(55%)	500	275	—	—	—
熔 磷(20%)	72	—	—	14.4	—
硫 安(20%)	32	—	6.4	—	—
過 石(21%)	24	—	—	5.04	—
加 加(60%)	16	—	—	—	9.6
塩 素(46%)	20	—	9.2	—	—
尿 肥(完熟)	4,000	—	(0.6%) 24.0	(0.3%) 12.0	(0.6%) 24.0
牛 尿	540(3石)	—	(1.5%) 8.1	(0.2%) 1.08	(1.6%) 8.64
計	—	275	47.7	32.52	42.24
生草 9,690kg中の肥料成分	—	17.0	43.4	16.76	67.15

電燈を入れることが、今年のとおり敢えずの楽しみといえます。しかし、一面、奥さんが手を怪我して労働に従事出来なくなったことは、大きな精神的、肉体的な痛手でした。しかし、それも、草地を拡大し、機械を導入し、新たな夢を画いて、酪農理想郷を建設しようとして一歩も退かない信念には、頭の下がる思いがします。

春もすぎ、東海林さんの牧草地は、見事に開花期を迎えていることでしょう。電燈のつく日を祝福し、この「やれば出来る」の信念を、皆さんと共に学ぼうではありませんか。

(雪印種苗・営業部長)